

今回は生徒の皆さんにとって身近な、本校の施設について紹介しましょう。



まずはこの写真を見てください。ここに写っている校舎は以前のものです。左奥から図書館、1号館、2号館、3号館、そして1号館の前に旧武道館がありました。でも何か変ですよ。グラウンドが2つあります。実は赤い走路のグラウンドが古いものです。この写真は現在のグラウンドが完成した平成2年に撮影されたもので、この後、平成3年に旧1・2号館裏にあった成邱会館（昔の合宿所）と第3体育館（音楽部の練習に使用されていた）が解体され、旧グラウンドの取り壊しが始まりました。さらに平成4年度の入学式が終わってから旧講堂兼体育館は取り壊されました。翌年には現在のような立派な講堂兼体育館と人工グラウンドがお目見えしたのです。

生徒の皆さんにはおなじみの、全長4メートルに及ぶ御本尊不動明王像がステージ奥の祭壇（これを明王殿といいます）に安置されています。講堂兼体育館は、建てられた当時「三密堂」と名付けられました（ですから、講堂専用のシューズは「三密堂シューズ」、略して「密シュー」と呼ばれていました）。何かお寺のお堂のようですが、これは成田山新勝寺の鶴見貫首（当時）が、生徒の皆さんの修行の場になるようにとの願いを込められて名付けられたものです。同じように、1・2号館裏に建てられた新校舎は「五明閣」（現在の2号館）、人工グラウンドは「慧光苑」、新グラウンドは「自在道場」と名付けられました。これらは創立95周年記念事業として行われたもので、この他に、知心寮・育心寮も立てられました。あれからちょうど20年の月日がたったのです。ちなみに、現在の弓道場は新グラウンドと同時に完成したもので、それ以前は今の講堂南側の駐輪場（写真ではもう更地になっています）にありました。

講堂兼体育館の高さは22.6メートル、間口が37.4メートル、奥行が63.9メートルあります。内部を少し紹介しましょう。玄関に入ると、ホールの両側に陶板壁画が目に入ります。これは陶芸家の土肥満・紅繪夫妻と、そのご子息である心之典氏の共同制作による『連環する宇宙』です。紅繪氏の父君は刀泉という陶芸の大家で、旧制成田中学校の卒業生というご縁がありました。1階はアリーナで、奥に室伏

広治選手の大きなパネルがかざってあります。室伏選手については今さら紹介することもないでしょう。「偉大なる」という言葉の似合う本校自慢の卒業生の方の一人です。

2階に上がると講堂兼体育館のフロアがあります。正面の舞台には縦7メートル、横20メートルの巨大な緞帳が目飛び込んできます。朝日を受けて群走する駿馬を描いた『飛翔』という作品で、本校に昭和41年から43年まで在職されていた、篠崎輝夫画伯によるものです。舞台をはさんで右側に鶴見前貫首の手による『不動心』、左側には旧制成田中学校の卒業生で参議院議長も務められた井上裕元文部大臣の手による『文武両道』の書が掲げられています。また、舞台には新勝寺の橋本現貫首からご寄贈をいただいた、オーストリア製のピアノの名器「ベーゼンドルファー」が置かれています。ベーゼンドルファーは熟練の職人が約1年をかけてやっと1台だけ製造されるもので、年間製造台数はわずか250台、1828年の創業以来まだ5万台しか世に出ていないという、とても希少で高い技術を誇るピアノです（「ベーゼンドルファーHP」より）。1828年創業というとまだ天保の改革も始まっていません。

さきほど、このフロアは2階と紹介しましたが、正確にいうと本当は3階になります。というのは、ステージ下に倉庫と女子トイレがありますが、これが2階に当たるのです。しかし、校内では2階といえば講堂兼体育館のフロアのことを指すことがもう定着しています。

もう一つ写真をご覧くださいませ。



この写真は昨年10月16日に関東地方を襲った台風26号の被害の様子を撮ったものです。グラウンドがすっかり水没しているのがわかります。実はこれ、わざとこうなるように設計されていると知ったら、皆さん驚きませんか。昔、ここは田んぼで、戦前の地形図をみると根木名川の氾濫原であったことが想像できます。ここにグラウンドを造成するために用地買収を行った際、関係者の理解を得るため、急激に雨量が増えた場合に備えて、一時的に水を貯めておく空間を地下に作ったそうです。この日は川がかなり増水してとても危なかったのですが、この近隣は数世帯の民家と近くの道路に浸水があっただけですみました。このような備えがあることは普段はなかなか見えませんが、いざという時にそれが役立つなんて、何か誇らしい気持ちになります。

今回はここまでとします。

(深田富佐夫)